

ヤコブ3章「舌へのくつわ」

1A 舌の制御 1-12

1B 教師への裁き 1-2

2B 舌の大きな力 3-4

3B 不義の世界 5-8

4B 賛美と呪い 9-12

2A ふさわしい行ない 13-18

1B 敵意を隠す知恵 13-16

2B 平和の実を結ぶ知恵 17-18

本文

ヤコブの手紙3章です。私たちは今、ヨブ記を学んでいますが、非常に興味深いですが、その内容が相互に関連しています。友人たちのヨブに対する言葉が、いかに愛がなく、それゆえ知恵に欠けているかを私たちは読みました。まさに、これから読む内容であります。確かに、ヤコブ書5章において、この手紙のまとめをする時にヨブの例をヤコブが取り上げているので、納得がいきます。

3章において、いかに私たちが言葉において失敗するかについてヤコブが語り始める、そのいきさつを、もう一度おさらいしたいと思います。ヤコブは、試練から話を始めました。そこで、私たちの肉が刺激されて誘惑も出てくる話をしました。「人はそれぞれ自分の欲にひかれ」とありました。しかし、御言葉を素直に聞いて、心にある汚れや悪を捨て去るのだという勧めを読みました。さらに、聞いて受け入れるだけでなく、その命令に応答する、つまり実践する必要も教えていました。

そこで私たちの過ちは、聞いているだけでそれを行わないと、言っていることと行っていることに乖離が生じる、歯車が合わなくなることです。話している言葉が、心の清さと良い行ないと一対になっていないことが起こります。ですから1章26節にこうありました。「自分は宗教に熱心であると思っても、自分の舌にくつわをかけず」教会において、クリスチャンとして熱心だけれども、言葉が行いから独り歩きし、滑っているのです。

そこで2章では、貧しい人が教会の礼拝に来た時のことを取り上げています。そこにある差別の心が御言葉によって清められておらず、信仰が言っているだけであることをヤコブは指摘しています。言っているだけの信仰は死んだも同然である。行ないのない信仰は、魂の離れた体と同然であると言いました。

そこで3章は、言葉だけになってその舌を制御していない罪深い姿について描いています。汚れや悪を放置したまま語っている。自分が語っていることに責任を持たず、自分自身が応答する

つもりのない言葉、そして、相手の精神的、霊的貧しさに共に住もうとする言葉ではなく、ないがしろにする言葉を放っているということです。ちょうど、ヨブの友人たちがその過ちに陥っていました。

1A 舌の制御 1-12

1B 教師への裁き 1-2

1 私の兄弟たち。多くの者が教師になってはいけません。ご承知のように、私たち教師は、格別きびしいさばきを受けるのです。

ヤコブは、言葉による過ちを語るにおいて、教師になろうとする者たちへの戒めが書かれています。なぜなら、教師こそが言葉をもって神に奉仕をする人たちであり、これから話す事柄に最も深く関わる人たちだからです。御言葉を教えるということは、当時のユダヤ教にとってはもちろん「ラビ」としての職務があり、非常に重要な働きでした。イエス様は、教える者たちに対することさらに厳しい裁きを、「忌まわしいものども」とパリサイ人と律法学者を呼びながら、宣言されました(マタイ 23 章)。ですから、ヤコブもここでそう言っています。

そして、新約聖書の教会においても同じように重要な務めであります。「奉仕であれば奉仕し、教える人であれば教えなさい。(ローマ 12:7)」そしてエペソ書 4 章では、キリストが教会に立てられた牧者は、その主な働きが教えることであることを次のように述べています。「こうして、キリストご自身が、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を伝道者、ある人を牧師また教師として、お立てになったのです。それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり、(4:11-12)」教会においては、時々に必要な預言の言葉が与えられ、それを語る人々もいましたが、教えるのはキリストの真理のついての教えであり、それを体系的にしっかりと教えねばいけないことが命じられています。

テモテへの手紙第二で、パウロがテモテに対してこう命じました。「あなたは熟練した者、すなわち、真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じることのない働き人として、自分を神にささげるよう、努め励みなさい。(2:15)」自分の意見を語るのではなく、神の意見を語るべく細心の注意を払います。そこでパウロはテモテに第一の手紙では、このような注意をしています。「自分自身にも、教える事にも、よく気をつけなさい。あくまでそれを続けなさい。そうすれば、自分自身をも、またあなたの教えを聞く人たちをも救うことになるのです。(4:16)」教える事だけでなく、自分自身にも気をつけて行ないなさい、と命じています。

この発言の前にパウロはテモテに、彼のうちにある聖霊の賜物を軽んじてはならないと励ましています。教師において絶対必要条件は、神によって語っている、あるいは神に召されて語っているという確信、あるいは召命です。そして召命によって、神から賦与された聖霊の賜物があるかどうか、であります。ヤコブの手紙の背景には、教師に多くの人々がなりたがっていることがあります。現代のキリスト教会でも、地域教会や牧会者の働きを否定するような動きがあります。そのような

群れほど、自分で教えたがる傾向を持っています。自分で示されたことを勝手に話し、その言葉に責任を取らないように動き、振る舞うことができるからです。これは危険なことです。

教えることは自分が嫌でもそうせざるを得ない召命があるかないか、ということです。パウロは、「もし福音を宣べ伝えなかつたら、私はわざわざいに会います。(1コリント9:16)」と言いました。旧約時代には、語らなかつたために殺された預言者もいたほどです(1列王21:35-36)。そしてエゼキエルに対して神は、罪人が悔い改めることを告げずに彼がその罪で死んだのなら、あなたも告げなかつたことによって死ななければいけないという戒めを受けました。預言者エレミヤは、こう言いました。「私は、「主のことばを宣べ伝えまい。もう主の名で語るまい。」と思いましたが、主のみことばは私の心のうちで、骨の中に閉じ込められて燃えさかる火のようになり、私はうちにしまっておくのに疲れて耐えられません。(20:9)」語ることには、このようにものすごい責任を伴います。その責任を無視して語ろうとすることは非常に危険です。

3:2 私たちはみな、多くの点で失敗をするものです。もし、ことばで失敗をしない人がいたら、その人は、からだ全体もりっぱに制御できる完全な人です。

ヤコブはここで、「私たちはみな」と書いてあるところに自分自身も含めていることでしょう。教師は格別に厳しい裁きを受けるわけですが、だからと言って無欠な訳ではありません。むしろ、多くの点で失敗をするものです。しかし、失敗から免れるよう最善の努力をすべきだということです。

「もし、ことばで失敗をしない人がいたら、その人は、からだ全体もりっぱに制御できる完全な人です。」という大切な真理があります。言葉がいかに力を持っているのか、それをこれからヤコブは例えを使いながら話していきますが、その前に言葉とここにある「からだ全体」との関係を考えてみます。

先ほど話したように、言葉だけで行ないが伴わなければ、その信仰は死も同然だということでした。それは大言壮語であり、実に終わりの日に現われる反キリストは、「大きな口を持っている、小さな角」としてダニエル書7章に出てきます。私たちは、実体のともなう言葉を語るべき見本を、神ご自身から見ることができます。神は、「光よ、あれ」と言われました。すると、光が造られました。神は無責任に「光をあれ」と言われなかつたのです。ご自分の霊をもって、その全身からその言葉を語られました。

それが、ここで言っている「からだ全体もりっぱに制御できる」ということです。一つの言葉を語るということは、全身から、あるいは自分の霊と魂から語るものです。ヨブが、「あなたはだれに対してことばを告げているのか。だれの息があなたから出たのか。(26:4)」と友人らに問いかけました。自分の霊の動き、自身の全体をもって私たちは言葉を語るのです。

そしてそのような人が「完全な人」とあります。これは1章4節にあった、試練によって忍耐を働かせると、「何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全な者となる。」というところと同じ考えです。つまり、言葉において失敗しないということは、霊的成熟にそのまま直結しています。

2B 舌の大きな力 3-4

3 馬を御するために、くつわをその口にかけて、馬のからだ全体を引き回すことができます。4 また、船を見なさい。あのよう大きな物が、強い風に押されているときでも、ごく小さなかじによって、かじを取る人の思いどおりの所へ持って行かれるのです。

言葉の持つ力を、馬のくつわと、船の舵に例えています。私たちは、神のかたちに造られ、言葉を有する者となりました。そして、言葉によって全体をこのように動かすように造られているのです。箴言13章3節に、「自分の口を見張る者は自分のいのちを守り、くちびるを大きく開く者には滅びが来る。」とあります。ここで大事なものは、「そうであれば、言葉を話さない。」ということではありません。それはまるで、馬にくつわをかけても何も動かさないことと同様であり、小さな舵に手は触れていても動かさないということと同様です。それは、誤った方向に舵取りするのと同じぐらい悪いことです。

そうではなく、舌を制御するための魂を込め、自分の生活をかけた努力をすることです。ですから、これは私たちの力ではできません。自分の霊から言葉を語るのですから、大事なものは神の御霊に満たされているかどうかであります。御霊に満たされることに集中する時に、その語られる言葉には知恵があります。人を立たせることができ、病んだ人、傷ついた人を回復させることができます。

3B 不義の世界 5-8

5 同様に、舌も小さな器官ですが、大きなことを言って誇るのです。ご覧なさい。あのよう小さい火があのような大きい森を燃やします。6 舌は火であり、不義の世界です。舌は私たちの器官の一つですが、からだ全体を汚し、人生の車輪を焼き、そしてゲヘナの火によって焼かれます。

制御しない舌は、このような害をもたらします。ヤコブはこの害を、山火事に例えていますが、さらにその火をゲヘナの火に関連付けています。実に、制御しない舌がその人全体をゲヘナに投げ込むことさえあるのだという深刻な状態を説明しています。一昨日のヨブ記の学びにも引用しました。イエス様が聖霊の力によって悪霊を追い出しておられるのを、律法学者やパリサイ人らが、「ベルゼブルの力によって追い出しているのだ」と言いました。そこでイエス様が、聖霊に対する冒瀆は許されないと言われた後で、こう言われました。「わたしはあなたがたに、こう言いましょ。人はその口にするあらゆるむだなことばについて、さばきの日には言い開きをしなければなりません。(マタイ12:36)」

3:7 どのような種類の獣も鳥も、はうものも海の生き物も、人類によって制せられるし、すでに制せられています。3:8 しかし、舌を制御することは、だれにもできません。それは少しもじっとしていない悪であり、死の毒に満ちています。

ヤコブは今、創世記の初めにある人に与えられた神の使命について話しています。「彼らに、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配させよう。(1:26)」興味深いことに、私たちが身近でその姿を見ることができるのは動物園や、サーカスです。獰猛な動物、巨大な動物であっても、物の見事に動物たちを調教しています。これだけ人間には、被造物を支配する力が与えられています。神のかたちに造られていますね。しかし、なんと自分の顔のちよこつとついている口、その中の舌は制御することができません。

それはなぜか？次の話に書いてあります。心にあるものが言葉になります。つまり、心の中にある悪意が舌にまで上り、それが言葉として発せられた時に毒を持ちます。

私が信仰を持つきっかけになったのが、三浦綾子さんの書かれた本「光あるうちに」でした。そこには、法律に罰せられなくとも、どれだけの殺傷能力はどちらが強いかということで、噂話を挙げていました。物を盗むことは窃盗罪で捕まります。けれども実際に物を盗まれて、精神的ショックは大きいですが、言葉によるものとは違います。名誉棄損罪というものがありますが、そこに至らない、陰湿な噂話はどうでしょうか？このことは人を死に至らせる力を持っています。けれども、いかに私たちはこのことを平気でやっているだろうか、という内容がありました。

詩篇と箴言には、言葉の持つ力、その悪の力をたくさん言及しています。ダビデが必死に祈ったのは、その多くはそしりからの救いでした。「私に敵対する者どもは、私の骨々が打ち碎かれるほど、私をそしり、一日中、「おまえの神はどこにいるか。」と私に言っています。(詩篇 42:10)」口に出さなくとも、憎しみを心に抱いている場合もあります。「憎しみを隠す者は偽りのくちびるを持ち、そしりを口に出す者は愚かな者である。(箴言 10:18)」

4B 賛美と呪い 9-12

ここまでは、一般的な口のもたらす災いでありましたが、ヤコブは本題に戻ります。宗教の熱心さがあっても、むしろその熱心さの中で置き去りにされていく、舌を制御することについて語ります。

9 私たちは、舌をもって、主であり父である方をほめたたえ、同じ舌をもって、神にかたどって造られた人をのろいます。10 賛美とのろいが同じ口から出て来るのです。私の兄弟たち。このようなことは、あってはなりません。

このことが、実際に起こるのです。つい最近、信仰歴の長いある方とお話しをしたのですが、賛美を元気よくした後、間もなくしなうちに誰かのことを非難している場面を見て、いったいどうい

ことなのでしょうね？と仰っていました。まさに、ここで話していることです。同じ舌で神を賛美し、他の兄弟を呪います。

ここで大事なものは、「かみにかたどって造られた人」とあります。私たちの生きている民主主義の社会は、言論の自由が保障されています。これは空気のようになっていて、それゆえ自分の思っていることを話さなければ不自由だ、制限をかけられていると感じます。しかし、そこでしばしば犯されているのが、中傷であったり、非難であったりします。忘れられているのが、「神のかたちに造られた」ということです。もしこの真理を心に留めておけば、自分が呪っているその相手が傷つくことは、すなわち神ご自身を痛めつけていることなのだ、ということです。人のことを悪くいうことは、神への恐れがあれば到底できないことなのです。

3:11 泉が甘い水と苦い水を同じ穴からわき上がらせるというようなことがあるでしょうか。3:12 私の兄弟たち。いちじくの木がオリーブの実をなせたり、ぶどうの木がいちじくの実をなせたりするようなことは、できることでしょうか。塩水が甘い水を出すこともできないことです。

このことは、イエス様ご自身が話されたことです。ルカによる福音書 6 章を開いてください。とても大切な箇所なので、前後関係を知るために 41 節から読みます。「あなたは、兄弟の目にあるちりが見えながら、どうして自分の目にある梁には気がつかないのですか。自分の目にある梁が見えずに、どうして兄弟に、『兄弟。あなたの目のちりを取らせてください。』と言えますか。偽善者たち。まず自分の目から梁を取りのけなさい。そうしてこそ、兄弟の目のちりがはっきり見えて、取りのけることができるのです。」自分の目の前の梁が見えない時に、他の人の悪いところを非難していきまます。自分自身の大きな問題があるのに、他人にその問題があると言います。主の言葉は、ヤコブが言ったように自分自身が純粋な心で受け入れ、悪や汚れを捨て去るのです。

続きを読みます。「悪い実を結ぶ良い木はないし、良い実を結ぶ悪い木もありません。木はどれでも、その実によってわかるものです。いばらからいちじくは取れず、野ばらからぶどうを集めることはできません。良い人は、その心の良い倉から良い物を出し、悪い人は、悪い倉から悪い物を出します。なぜなら人の口は、心に満ちているものを話すからです。(ルカ 6:41-45)」私たちの心の源にあるのが、木の根っこなのです。その木の根っこがどうなっているかによって、実が結ばれます。ですから、何の木を植えているのか、どのような種を植えたのかが重要であります。悪意の種が植えられたら、必ず悪い実を結ぶのです。言葉を上手に合わせて話していくというのは、この世の哲学です。そして人間関係の改善化のために言葉の勉強をすることさえ、世の哲学です。神の前で自分の心はどうなっているかを確かめること、これが神の求められている言葉の清めになります。

私たちが、知識では神を賛美するような心をもって、それを言葉に出して賛美しても、私たちの悪意が心に残っていれば、それもまた口に出てきます。こうした混じった状態はあってはならない

ことだ、とヤコブは言います。これを後に、5 章で「二心」と彼は説明します。一つの心の中に二つの心があるのです。しかし、それは私たちのうちにおられる聖霊を悲しませることです。コリント人に対して、遊女と寝ることは、あなたがキリストによって買われたものであるから、あなたの内に住まわれるキリストと、遊女を一つにすることだとパウロは話しました。私たちが人を悪く言うことは、同じようなことを心で行っているのだということです。

2A ふさわしい行ない 13-18

ヤコブは、続けてキリスト者たちに話しています。私たちはちょうど昨日学んだ「神の知恵」に直接関わる話題です。ヨブの友人たちが、神の知識ということで語っていることでさえ、その言葉が棘の入っているものになってしまいました。同じように、キリスト者の間で起こる争いを見ていきます。

1B 敵意を隠す知恵 13-16

13 あなたがたのうちで、知恵のある、賢い人はだれでしょうか。その人は、その知恵にふさわしい柔和な行ないを、良い生き方によって示しなさい。

「知恵のある、賢い人はだれでしょうか」と問いかけているところに、いわゆる知恵のある、賢い人たちの間で起こることであること、そのように思っている人々に対してヤコブが焦点を合わせています。知恵というのは、知識ではないことを私たちは学びました。知恵というのは、神の権威ある言葉を、主を恐れつつ受け入れることによって、その言葉通りになっていく、力をもって物事を動かすのが知恵であります。したがって、キリスト者にとってその語っている神の知識と呼ばれるものについて、「柔和な行ないを、良い生き方」の助けになっているのか、ということであります。

ある聖書教師がこう言いました。「何か教理的に強い確信を持っていたら、それが教会全体にとって知るべき、理解すべき真理だと感じているなら、初めにその真理がいかに自分の生活を変え、イエス様に似たものになっていったかを見る機会を与えてください。」私たちはとにかく、自分が確信をもっていることについて、他の人々を説得させようとしません。そして、他の人たちがその確信を持っていないことを見て、「この人たちは知らない」として見下げて、批判して、時には説得して変えさせようとしません。神の知識は、そのようなもののためにはありません。その知識によって、いかに自分がキリストの似姿に近づいたのか、その物差しで測られるべきなのです。

14 しかし、もしあなたがたの心の中に、苦いねたみと敵対心があるならば、誇ってはいけません。真理に逆らって偽ることになります。15 そのような知恵は、上から来たものではなく、地に属し、肉に属し、悪霊に属するものです。16 ねたみや敵対心のあるところには、秩序の乱れや、あらゆる邪悪な行ないがあるからです。

これは、本当に大切なことです。しばしば、神の真理のために戦っているのだとして言い争って

いる時に、自分自身の心の監視がなされていないことが多々あります。「真理に逆らって偽ることになる」とヤコブは言っています。私がいつも危険だと思うのは、「正しい」ことを言い張ることです。「正しい」と言い張るところに罪がある、ということをイエス様が言われました。(実際は、ヨハネ9章、目が見えると言い張るところに罪が残ると言われました。)

イエス様の言葉を聞いて、それを信じたというユダヤ人に「わたしのことばにとどまりなさい。」との勧めをしました。けれども、彼らは留まりませんでした。イエス様の言われていることに反発し、ついに、「あなたは不品行によって生まれた者だ」とまでそしりました。「私たちには、アブラハムを父として持っており、神ご自身が父である。」と言いました。実にその通りです。しかしイエス様は、「あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者であって、あなたがたの父の欲望を成し遂げたいと願っているのです。(ヨハネ 8:44)」と言われました。事実、ユダヤ人はイエス様に石を投げつけようとしていました。そして後に、公式にイエスを死刑に定めることに加担したのです。

そしてヤコブは、「知恵」と呼ばれるものが、「苦いねたみと敵対心」から来るものであれば、「地に属し、肉に属し、悪霊に属する」と言っています。地というのは、罪が入り込んで、そこからいばらしか出てこない、呪われている地であります。カインがアベルを殺して、その流された血を受け入れた地であります。この世においては、そのような知識と呼ばれているものがたくさんあります。誹謗中傷、罵倒は日常茶飯事です。けれども、キリスト者が同じようにやって良いものでしょうか？これでは、「地」に属しているのです。

そして、「肉に属している」とあります。ガラテヤ書にある肉の行ないの列挙を見てみましょう。「肉の行ないは明白であって、次のようなものです。不品行、汚れ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ、酪酊、遊興、そういった類のものです。前にもあらかじめ言ったように、私は今もあなたがたにあらかじめ言うておきます。こんなことをしている者たちが神の国を相続することはありません。(ガラテヤ 5:19-21)」私たちは、不品行であればそれは肉に属しているとすぐに分かります。ポルノを習慣的に見ている、教会の結婚していない者同士が肉体関係を持ったというのであれば、すぐにそれはまずいと強く感じます。ところが、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみはいかがでしょうか？これは知的な領域に属することであり、賢さという名目で繰り広げられる肉の行ないです。同じように、これらのものは神の国に行けなくさせるものであります。

そして、「悪霊に属する」とあります。一切の口による罪は、その背後に兄弟たちを告発する者であると黙示録 12 章にある、悪魔の操作があります。そして悪霊どもの目的は、ここにあるように「秩序の乱れや、あらゆる邪悪な行ない」です。私たちには、刃物のように、あるいは銃器のように与えられているものに、インターネットがあります。メールがあり、ブログがあり、ソーシャルネットワークがあります。瞬時に他の人に話すことができるこの道具は、悪霊どもに利用される危険を持っています。一気に秩序が乱れる恐れがあります。私たちは御霊の力によって、これが霊の戦

いであることを認識し、この策略に乗らない細心の注意が必要です。そして気をつけるべきは、「ねたみや敵対心のあるところ」であります。この心になっている時は、いくら正論を語っても、それは地に属し、肉に属し、悪霊に属しています。

2B 平和の実を結ぶ知恵 17-18

17 しかし、上からの知恵は、第一に純真であり、次に平和、寛容、温順であり、また、あわれみと良い実とに満ち、えこひいきがなく、見せかけのないものです。18 義の実を結ばせる種は、平和をつくる人によって平和のうちに蒔かれます。

私たちに与えられている希望は、この最後の二節にあります。私たちキリスト者が知恵と呼ばれるものを考える時に、それが何かを教えてくれているのがここです。これが、「上からの知恵」であることに注目してください。これまで私たちが見てきた、舌が制御できぬ大きな災いの元であることを見るにつけ、言葉で失敗しない人はいないと書かれている程、誰もが失敗しているのですが、しかし知恵というのは、上から与えられます。神から、御霊から与えられます。

そして、その知恵の初めは「純真」です。今、見たように、ねたみや敵対心を捨てて、一心に御言葉を受け入れている姿であります。「すべての汚れやあふれる悪を捨て去り、心に植えつけられたみことばを、すなおに受け入れなさい。(ヤコブ 1:21)」この次に、「平和、寛容、温順」と続きます。平和と言う言葉を聞くと、私たち日本人は「和」の精神を思い浮かべます。対立を極力避けるべく動こうとします。しかし、それが平和なのではありません。御言葉によって洗い清められた状態、真理によって清められているところから出てくる神の平和であり、その平和に満たされている状態です。

その平和の中で、人に対して心を広くする寛容というものがあり、不必要な対立をせず、自分を譲る温順があります。思い出すが、アブラハムの知恵です。甥のロトと行動を共にしていましたが、互いの羊が多くなり、羊飼いで争いが起こった時に、そこにカナン人がいるのを見て、彼はロトに勧めたのです。「私から別れてくれないか。もしあなたが左に行けば、私は右に行こう。もしあなたが右に行けば、私は左に行こう。(創世 13:9)」

さらに、「あわれみと良い実とに満ち、えこひいきがなく」とあります。そうですね、これは 2 章に関わる場所です。貧しい人が教会に来て、自然にその人を尊ぶ姿であります。憐れみがあり、そしてえこひいきしないことです。教会は常に、自分自身よりも他者を尊ぶところ、他者のために存在しているところでもあります。

最後は、「見せかけのない」というものです。私たちは、いかにも他者を大切にしているように見せかけることができます。しかし、意外に新しくいらした方々はすぐに見せかけかどうかを見分けることができます。ある方が仰っておられましたが、ご自身の老齢の母親を教会に連れて行った時

に、教会がいろいろな言葉をかけてくれるのだが、それは教会に引き込もうとしているからだということが分かったそうです。その後いろいろな教会のイベントに参加させる、ということのこと。けれどもある教会で、牧師さんがそのまま、「あなたは死んで地獄に行きたいですか、天国に行きたいですか？」と尋ねました。そして天国だと答えたそうで、それから聖書の学びに参加してもらうようにさせたそうです。そしておばあちゃんは信仰をもって天に召されました。どちらが愛でしょうか？後者なのです、なぜなら見せかけのないのが愛だからです。

そして、知恵というのは平和という種に蒔かれた後に、義という実を結ばせます。平和によって初めて正義があり、また正義のない平和は存在しません。人々が公平な取り扱いを受けている時に平和があります。人々が、自分の受けた仕打ちに対して神が正義をもって裁かれるところに、平和があります。イザヤ書では、正義と平和が一對になって神の国の幻が語られています。「その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に着いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これをささえる。今より、とこしえまで。万軍の主の熱心がこれを成し遂げる。(イザヤ 9:7)」

今回は、この問題の続きである「争い」について取り扱います。